

さよなら シューティングスター

喚く狂人

私は、お星様のつもりだった。

夜空にきらきら輝いててきれいなあれと同じくらい、自分は幸せものだと思っていた。

……馬鹿な話だ。空想の世界ほど美しく思える。私が見てたのは、ファンタジーだった。世界を見る目も耳も、私は意図的に一切鍛えられず育った。だから私は幸せものだった。なんにも見えていなけりゃ、どんな地獄もお花畑なんだ。

「ただいま帰りました！」

「ああ、お帰り、魔理沙ちゃん」

「あはっ、ンあ、は、お帰っ、りい」

とうさまのお部屋には、とうさまとかあさまと、あと問屋のおじさまがいた。しまった。お部屋にお客さまが来ているときは大事なお話してるから、入っちゃいけないのに。

「おじさま、こんにちは。ごめんなさい、お邪魔しました」

とうさまはお仕事の邪魔をされるとすぐ起こる。お仕置きはいやだ。だからせめて、とうさまがあんまり機嫌を悪くしないように、あいさつだけしてすぐに出ようとした。

「おっと、ちよっと待った魔理沙ちゃん。おじさんとお話ししようじゃないか。霧雨殿、かまいませんな、ここで？」

「ええ、もちろんですとも。魔理沙、入りなさい」

「え、あ、はい、わかりました」

なのに呼び止められて、ちよっと困っていたのだけど、なんだか入ってもいいみたいだ。とうさまはびっくりするくらいにこにこしていた。大事なお話が、うまく終わったのかな。あつ！ はアつ、んあア！ おつ、ほおつあ！ か、あつ、はひいッ

かあさまは床にあおむけになっていた。裸んぼだ。かあさまは奴隷だから、家の中じゃ

首輪しかつけちゃいけない。かあさまの娘の私もほんとと同じなんだけど、まだ小さくて風邪を引いちゃいけないからって、着ておけていわれてる。いい加減、子供あつかいはやめてほしいなあ。

「ぬう、全くこの穴ときたら、何度ハメてやつても飽きんわい」

おじさまも裸んぼだった。かあさまに覆いかぶさって、なかよししていた。とうさまのお客さまやお友だちとなかよしして、大事なお話をうまくいきやすくするのが、かあさまのお仕事だ。なかよしになるのがお仕事だなんて、とってもすてきだ。私もしたいのに、とうさまはまだ駄目だつていう。

「おう、実の娘が帰ってきたっていうのに、アンアンヨガつててええんか？」

「あうッ、あはっ、魔理沙ア、まりさお帰えあはッ！ んあ！」

「お帰りはさつき言うたわバカタレ」

かあさまはいつもみたいに、しあわせになるお薬を使ってるみたいだった。お客さまとなかよしするときに、いつも使うやつだ。名前は私が自分で勝手につけた。だって、あれを吸ったかあさまは、こんなふうに笑顔になるし、おちんちんがずぶずぶ出たり入ったりするたびに、とっても嬉しそうな声をあげるんだもん。すぐくうらやましい。いろんな人となかよしになれて、しかもしあわせにもなれる。最高のお仕事だ。

「おおーッ、射精すぞ射精すぞオ、性奴隷が、おっおっおっおっ」

「あはあ、くるう、ザーメンくるう、はひ、あつ、イクッ、イクッイクイクイクッ、うあ、あはあああああああッ！」

おじさまの腰の動きがどんどん早くなっていく。かあさまの声も、どんどん嬉しそうになっていく。激しければ激しいほど嬉しくてしあわせなのが、なかよしだ。そうしてると、そのうちにしあわせがはち切れる。それは、イク、っていうらしい。二人は、いっしょにイッたみたいだった。見てれば分かる。かあさまがイクところは今まで何度も見てきたし、男の人がイクときは、大体同じような感じだもの。

おじさまは、おしっこしたときみたいに身体をぶるつと震わせる。なかよしの証が出た証拠だ。男の人がイクと出る、白くてネバっこいのが。それをお腹の中に注いだら、もうその二人はなかよしさんなんだって。かあさまはおじさまに何度も注いでもらってるから、もう大親友とかそういうのになってると思う。

「ッは、この女ときたら、本当に、何度使つても極上の名器で……毎度毎度、キンタマン中身、全部持つて行かれるかと思うわ。ホンマに」

おじさまはしばらく、かあさまにぴったり覆い被さっていた。なかよしの証を、一滴も無駄にしないようにしてくれてるんだ。

そのうちにおじさまはため息をつく、のっそりと起き上がってソファに座り込んだ。冬眠したクマみたいな仕草だった。かあさまはまだぐったりとして、寝転がったままだ。なかよしすると、男の人も女の人も疲れるらしい。だからみんな、こんなにくいことを、あまりしないんだって。で、おじさまはとってもいい人だ。もうおじさんなのに、そんな疲れることを、うちの店の女の人たちと——特にかあさまと、沢山してくれてるんだから。「いやあ、霧雨殿はまったく、すばらしい奴隷をお持ちだ。うらやましい限りで」

「気に入っていただけてなによりですよ。ほら魔理沙、ご挨拶するんだ」

「あつ、はい」

いけない。二人のなかよしに、すっかり見入っちゃった。最近、人が仲良ししてるのを見てると、頭がぼうつとしてお腹があつくなる。大人になつて証拠だつてとうさまに教わるまでは、病気なのかなってちよつと怖かった。

「おお魔理沙ちゃん。君のお母さんのお汁で、儂のちんちんが汚れてしまったんだ。さあ、綺麗にしてみらえるかな？」

「はい、おじさま」

かあさまの奴隷である私も奴隷だから、いろんな人となかよしするのがお仕事だ。一応、でも、私の身体じゃまだ早いからって、なかよしはさせてもらえてない。その代わりに、

「ごあいさつをすることになってる。これもお店にかかわる大切なお仕事だから、ちゃんとやらなくちゃ。」

「失礼します」

「おっと、その前に。服を脱いでおくといい。せっかくのおべべがベトベトになったら、嫌だろう？」

「うっ」

おべべって言い方はちよつと古くないかな。でも確かに、ごあいさつすると、いろんなお汁でべとべとになる。しかも中々とれないし。脱いじゃお。

「ひひ、まだ赤飯も炊いとらん娘の、平らでぶにつぶにのカラダ。たまらんなアおい」

おじさまはニコニコしながら、私の身体を見て、お汁でべとべとのおちんちんを弄っている。普通の人はかあさまの裸でニコニコするのに、おじさまはちよつと変わってる。

「おっきい……」

ソファに股を開いて座ったおじさまの下にひざまずいた。おじさまのはまだ大きくて、硬いまんまだ。まるで龍神さまみたいだ。私の顔くらいあるんじゃないかな。

「ふふふ、おじさんは絶倫だからねえ、魔理沙ちゃんが挨拶してくれるってわかったら、もうビンビンだよ。さ、早く」

「はあい」

ふにやふにやの方が啞えやすいんだけどなあ。だってこれ、ちょっと太すぎだ。アゴがぜったい疲れる。でも、お客さまだから文句は言わない。大きく口を開けて、先つちよをパクッと啞え込んだ。

「んふう……」

苦じよっぱいような、甘じよっぱいような、変な味だった。おじさまのおちんちんの味に、かあさまのお汁の味が混ざってるんだ。ハッキリ言つて、おいしくない。おいしくないんだけど、でもなんだか、ドキドキする。このおちんちんがさつきまでかあさまとなかよしして、なかよしの証を、たっぷりお腹の中に注いだんだ。それが一番、ドキドキする。

最近、ごあいさつすると、ドキドキするようになってしまった。これはまだ、とうさまにも言つてない。さすがにそれはヘンだって言われたらやだし。

「おオオツ……親子丼……たまらんなア、これがあるから、霧雨さんとこの女ア買うのはやめられんのじゃア……」

まだほとんど何もしてないんだけど、おじさまはしあわせな声を出してた。やつぱり、ちよつと変わつてると思う。いい人だとは思ふんだけどね。

「はむ、かぷつ、ちゅ、んふ、くむ」

先つちよのところ、口の中でぺろぺろ舐める。特にこの、おしつことかなかよしの証が出てくるところを舌でクニクニしてあげると、男の人はとっても喜んでくれる。かあさまほどは色々できないけど、私もこういうやり方は得意だ。……おじさまのは大きすぎて、これだけでもアゴが疲れちゃうんだけど。

「オッ、オッ、おオオオー……ッ！ この歳にしてこの仕込み具合ッ！ オホお、これがたまらんのじゃアー、ウウウッ」

おじさまは小さく、びく、びくつて震えていた。何がたまらないのかは全然わかんないけど、とりあえずしあわせにはなってくれてるみたいだから、いいや。続けよつと。

「んっ、んっ、んうー……」

ちゅうちゅう吸い付きながら、半分くらいまで啜えてみた。私の口じゃ、これくらいが精一杯だ。いつかはかあさまみたいに、根元まで啜えられるようになっていいな。だってとうさまのおちんちんを深く啜えたときのかあさまは、見ててうらやましくなるくらい、しあわせそうなんだから。

変な味は、私の口いっぱいに広がっていた。いや、味だけじゃない。においも熱さも、私の身体いっぱいに広がって、内側からじくじく、じくじく、つてつついてた。それは、普通の人ならイヤだって感じるのかもしれない。だけど私は、イヤなんて思わなかった。

この変な感じが、クセになってるんだと思う。私、おちんちんがクセになってる。

「ん、ふ、んんっ」

おまたがむずむずする。太ももをこすりあわせるけど、あんまり意味はなかった。お腹の奥が熱くて、きゆうきゆうしてる。そこには大事なお部屋があつて、身体がしあわせになりたがってるときには熱くなるんだって、前にかあさまが教えてくれた。私の身体は、しあわせになりたがってる。……でもこれ、ちよつと困る。私はまだ、なかよしできない。だから、しあわせになりたいって言われたって、どうしようもないんだ。

「んん？ 魔理沙ちゃん、どうしたのかな？ もじもじして」

そういう色々を、おじさまは多分分かつてる。啞えたまま見上げたおじさまのお顔は、なんだかにこにこしてた。こういうお顔のときのおじさまは、ちよつと意地悪だ。

「そんなにお股を擦り合わせて、痒いのかな？ 虫にでも食われたのかな？ それなら、搔くといいよ、さあほら、遠慮せずにさ」

おじさまはにんまりした。搔くといいよ、って、私に任せる言い方だけど、おじさまはお客さまだから、断ることはできない。やらなくちゃ。

今まで、お布団の中でこっそりしたことはあつたけど、人前でしたことは一度もない。恥ずかしくて、みっともない気がしたから。でも、言われたことをちゃんとするのが奴隷

だ。だから私は、そこに指を伸ばす。

「んくっ！」

びりつとした。私の裂け目は、なんだか湿っていた。しあわせになりたがってるときに出るおつゆだって、かあさまが教えてくれた。おちんちんとなかよしになつて、お互いにしあわせになるためのおつゆだって。……私、まだなかよしできないんだけどなあ。

「んっ、んーうう、んんっ」

なかよしできないんだから、こんなおつゆ、出ても意味ない。なのに、わたしの身体はそんなこと分かつてないらしくて、指先でいじいじすればするほど、おつゆをとろとろと流す。駄目だって、床が汚れちゃうじゃんか、ここ、とうさまのお部屋なのに。

「おおおおッ、魔理沙ちゃんいいねえ、いいよお、ヒヒ、こんなちみっこがチンポ啜えてオナニー、最高のシチュエーションや。ほら、そうやっていじり回しながら、おちんちんしゃぶるのも続けておくれよ」

「んんっ」

むつかしいこと言うなあ。二つのことを同時にするのって、大変だ。裂け目をいじると声がどうしても出ちゃうし、頭がびりびりして、集中できない。うっかり噛んだりしないように気をつけなくちゃ。噛んだらお仕置きだ。お店の奴隷のお姉さん達、お仕置き部屋

から出てきた後は、しばらくボロボロだから、あそこに行きたくないなあ。

「おオッ、これア良い、ぷにっぷにのキャンディボイスがチンポに響いて、おおおう」

全然集中できなくて困ってただけど、おじさまにとっては関係ないみたいだった。男の人はよく分からない。特におじさまは、なんだかヘンだし。

「ンッ！ くふ、むう、んっ、ふうん、ぢゅふ、んんっ」

でも、しあわせになつてくれてるなら、まあいいか。やりたいように自分を弄りながら、頭を動かして、唇でおちんちにこあいさつする。普段なら舌も使うんだけど、今はそこまではできなかった。

「んッ、く、むう！ ん！ んんっ、ぢゅる、くふ、んんううっ……！」

だんだんと、声の出るのが抑えられなくなっていく。お腹の奥がどんどん熱くなつて、ふわふわ浮いているみたいになっていく。これが、しあわせだっていう感覚だ。頭の後ろ側のあたりが、火をかけた炭みたいにちりちりつて熱くはじめて、白く光りはじめる。

自分で自分のことが分からないわけではない。私、そろそろイきそうなんだ。いつもよりずっと早い。多分、おちんちんを咥えてるからだ。おちんちんにこあいさつして、味とか匂いとか、感じてるからだ。これは、女の人をしあわせにする棒。わたしだってしあわせになつてしまう。

「オッ、おおッ、くう、こんのメスガキ、なんちゅう、オッオッ、また上つてくる、精液が上つてきたわア、オオオ、魔理沙ちゃん、ほら、いつも通りにするんだッ」

イきそうなのは、私だけじゃないみたいだった。おじさんは、脚とかたふたふのお腹とか、ぶるぶる震わせていた。イきそうなんだ。

言われたとおり、いつも通り口を離した。最後までしてあげられないのは残念だけど、おじさん自身がそうしてくれって言うんだからしょうがない。両目を閉じて顔を上向けて、口も開けて、おまけに舌も突き出した。それがいつもの姿勢だった。

「おう、それだ、その歳でそのメス顔ッ、たまらん、ウウッ、全くだまらんつ、お、おお、射精る、ありがたく思えよこんの奴隷が、親子ともどもザーメンでマーキングしてやるッ」
おじさまは勢いよく立ち上がって、自分のおちんちんをごしごし抜く。私はとるところになつたところをくちゅくちゅ音を立てて弄りながら、おじさんがいくのを待ち構える。

「オッオッオッオッ、オオオオオオウッ」

「あえあッ」

そのうち、おじさんのおちんちんから、熱いのがびゅるびゅるって飛び出しはじめた。それは私のお口の中や、突き出した舌の上、唇にほっぺに鼻にまぶたに、顔中のいろんなところに、ベとベと落ちていく。すっごく熱い。それに、すごい匂いだった。むわあッ

広がった匂いは、口や鼻から胸に入り込む。なかよしの証の匂いが。

「アうっ——くううんっ——！」

きゅん、つてなった。胸の奥に、お腹の奥が。それは私の身体の中であふれて、手足の先まで全部を埋め尽くしていく。

頭の中がしあわせであふれて、ばちばちって弾けていく。身体のアチこちがいうことを聞かなくなつて、びくびくがくがく勝手に震える。ふわふわって浮いてるような、ひゅうって落っこちてるような、ちよつとだけ怖くて、とつても最高の感じ。それが、イクつていうことだった。

私、イツちやつた。

あたりまえだった。なかよししたい、しあわせになりたいって身体が言つてるときに、なかよしの最後に注いでもらえるお汁を、舌や鼻や肌でたっぷり感じたんだから。これでイかないのは、何かのまちがいだ。

「ふぁ、あぁう、あぁ」

「っおおお……、はっふう、射精した、射精した。は、儂もそろそろトシかの、たつたの二発ぶちまけてやつただけで、こうも疲れるか、ふうう」

なかよしの証を出し終えて、おじさまは尻餅をつくみたいに、ソファに腰を下ろした。

お部屋は涼しいのに、おじさまは汗をかいてた。でも、そのことを変だとは言えない。私も汗をかいてるんだから。

ばちばち弾けるのも、ふわふわ浮いてるようなのも、もう収まつてる。でも、残り火が私の中でぶすぶすくすぶつてた。一度火の付いた炭がなかなか消えてくれないみたいに、私の身体も、一度うずうずしだすと、一回イッたくらいじゃどうにもならない。

どうしよこれ。困ったなあ。

「さあ魔理沙ちゃん。お化粧の時間だよ」

「ふあ……、はい」

いけない、ぼうつとしてた。ごあいさつのあとは、お化粧。何度もしてきたことなのに、忘れちゃうなんて。うっかりしすぎだ。

「んんっ」

なかよしの証は貴重なもので、そうそう何度も出せるものじゃない。しかも、ちょうど今のおじさまみたいに、出すととても疲れてしまう。だから、証をもらったら、無駄にしちゃいけない。お顔に出してもらったら、ちゃんとお化粧に使わないと。

顔のあちこちにへばりついていたねばねばを、両手を使って塗り広げていく。じつくり、しつかり、お肌におじさまの匂いが染みつくように。これがお化粧だ。匂いを染みさせて、

自分はあのひととなかよしなんです、あなたも私となかよしになりませんか？というのを、周りの人に伝えるようにするんだ。最初はなんだか変だなあって思ってたけど、でも、よく考えたら、これもすてきなことだと思う。みんながお化粧すれば、なかよしな人のいないひとりぼっちの人なんて、きつといなくなるはずだから。

「ふっふっふ、いいね魔理沙ちゃん、お化粧してずいぶん美人になったじゃないか」

おじさまはさつきみたいに、ソファに深く腰かけていた。どこかぐったりしてるのは、もう二回もなかよしの証を出してるからだ。私とかあさまのために。ほんとにいい人だ。

「さあて、魔理沙ちゃん。実は今日ここに來たのはね、君にお願いがあつたからなんだ」
「えっ？ ……私に？」

思わず聞き返した。だって、大人のひとは、みんなとうさまやかあさまに用があるんだ。私がこうしてあいさつしたりするのは、ついできなかつた。お願い？ 一体なんだろう。
「ポチを覚えてるか？ ほら、ウチで飼つてるレトリバー。昔遊んだらう？」

「はい、覚えてます」

昔、かあさまがおじさまのお店の人たちみんなとなかよしに行くのに、ついていったことがある。といつても、今よりずっと小さかつた私に手伝えることなんてなくて、お店の外でずっと遊んでた。そのとき一緒に遊んだのが、ポチだつた。ちっさくて、ふわふわ

してたのは覚えてる。茶混じりの金色の毛がきれいだった。

「実はね、君が喜ぶかと思って、連れてきてるんだ」

「えっ！」

おじさまは立ち上がって、部屋の扉を開けた。するとすぐ、金色をした何か大きいのが飛び込んできた。

「わあ！」

それは私に飛びかかってきた。思ったより重くて、床に倒れてしまった。

「わっ、わわ、わあ」

顔にぬるぬるしたものが当たる。生暖かい風も。びっくりしてしまっていた私は、何もできなかった。

「こらこら、ポチ、落ちつかんか。魔理沙ちゃんが驚いてしまつとるだろうが」

私にのしかかっていた金色が、離れる。おじさまが引き留めてるそれは、ワンちゃんだ。

「ほ、ポチ？」

おじさんはこの子のことをそう呼んだ。……でも、私が覚えてるポチって、あのころの私と比べてすらずつとずつと小さい、豆柴みたいなのだった。おじさんが連れてきたこの子は、まるで別物だった。だって、今の私と同じくらいの身長はあるんじゃないの、これ。

「はは、戸惑うのも無理はないよ。あのときのポチはまだ生後一年と経っていなかった。ほんの赤ん坊さ。でも犬の成長は早いからねえ。どうだい、見違えたらう？」

それはもう、全然違う。本当に同じワンちゃんかつて思うくらいに。……でも、この子は確かにポチだった。すぐくふわふわした毛並みとか、ちよつとだけ内側にねじれた右の耳とか、昔見たままだった。

「久しぶり、ポチ」

おなかのあたりに抱きつく。あつたかい。最初は驚いたけど、一緒に遊んだ友達だもの、久々に会えて、嬉しくないわけがなかった。

「おじさま、あの、お話って？」

「うん。実はね。ついさつきまで、君のお父さんと、君の初めてのなかよしの相手を誰にするかってことで、話をしてたんだ。そろそろなかよしするのでもいいんじゃないかとね」

「えっ！」

どきつとした。昔からかあさまがしてるのを横から見ただけで、私もしてみたいってずつとずつと思ってたことが、とうとうできるっていうんだから。

「でも、相手を見つけるっていうのも中々難しいんだよ。君のお父さんはね、大事なお客といきなりなかよしさせて、失敗したりしちゃいけないと、そう考えてたわけだ。理屈は

分かるだろう？」

頷いた。いくらしてみたいとはいっても、なかよしはお店の大事なお仕事の一つなんだ。中途半端な気持ちでやって——いや、中途半端なんかじゃないけど、とにかくお客さまに失礼があつたりしたら大変だし、そうしたら私だつてお仕置きだ。そんなのは嫌だった。「とはいえ、だ。何事も、やってみないことには上手になてならないだろう？　そこでおじさんは提案したのさ！　ポチとなかよしして練習するのはどうかってね」

「え、……えええっ!？」

びっくりしっぱなしだった。いや、でもこれは、しょうがないと思う。だって、ポチとなかよしって。ポチはワンちゃんだ。間違つても人間じゃない。冗談かなくて思ったけど、おじさんは冗談を言うときの顔をしてなかった。本気で言ってるんだ。……いや、でも、ワンちゃんだよ？　犬だよ？　人じゃないんだよ？

「驚くのも無理ないよね。急な話だもんね。でも、魔理沙ちゃんも、全然知らない人より、友達の相手をする方が楽だろう？　どうだい、考えてみてくれないかなあ」

「うーん……」

急だから驚いてるわけじゃないんだけどなあ。でも、おじさまの言うことは、間違つてはなかった。私は人見知りだから、いきなり知らない人となかよしになるのは、不安だ。

できれば知ってる相手がよかったし、ポチはその知ってる相手だった。ちょうどよかった……ポチが、人間だったら。

「まあ、お前が驚くのも無理はない。今までは人間の行為しか見せていなかったからな」「とうさま」

「しかしだ。ポチはオス、つまりは男だ。そしてお前は女。つまり男女だな？ あれは、男女でやることなんだから、人だろうが犬だろうが何の問題もないじゃないか。実際、犬と人が行為に及ぶことだってある」

「そうなんですか？」

「そうとも」

とうさまがそう言うなら、そうなんだろう。とうさまが嘘をついたことなんてないもの。といつても、やっぱりまだちよつとびつくりしてた。常識ががら崩れるっていうのは、こういうことなんだろうなあ。

「元々お前にはそのうち稽古をつけてやらなくてはならんと思っていたんだ。せっかくの機会なんだから、やらせてもらいなさい」

「……」

せっかくの機会。その通りだった。ずっとずっとしたいと思つてたことをできるのに、

逃がしちゃうのはもったいない。これは、あこがれてたオトナの世界への第一歩だ。

……いや、そんなのはこの際どうでもよかった。それより、私はもう我慢できなかった。お化粧したせいで、男の人の匂いをずっと感じてる。それは私の頭の中にまで入り込んで、私をくらくらさせてた。もう無理だ。誰でも、それこそ人間相手じゃなくてもいいから、なかよしになりたい。でないと頭がおかしくなってしまうそうだ。

「わかりました、私、ポチとなかよしします」

「おお！ よく言ったねえ魔理沙ちゃん。でもその前に、お菓の時間だよ」

「おくすり？ ……あつ」

おじさまに、白い粉の乗った薬包紙を渡される。しあわせになるおくすりだ。

「せっかくのはじめてなんだ。とびっきりの思い出しにしたいだろ？ さ、ほら」

うながされた。使い方は簡単、鼻から吸えばいいだけだ。……前から使ってみたとは思ってたけど、いざ使うってなると、ちよつと緊張する。むせたりくしゃみしたりしないかな？ 大丈夫かな？ そんなことを考えながら、粉をおそるおそる吸い込んだ。

「あつ！」

するとすぐ、頭の中で、ガァンって鐘の音が鳴り響いた。うるさいとは思わなかった。確かにすつごく大きな音だったけど、同じくらい、とっても素敵だと思った。

「あはっ、あっあっあはあっ」

世界が虹色に輝き始めた。頭の中の気持ちいいところを、天使がなでてくれる。びりびりつて、しびれるような感じが手足の先から広がってく。それと一緒に、いろんなお菓子を放り込んだ大釜の中で一緒に煮詰められるような、とびつきり甘くて、身体が溶けていくような感じがした。

「あはっ、あはっ、えへ、えへへえ」

身体が勝手にびくびく震えていく。別になにも面白いことなんてないのに、楽しくって仕方がない。心の底からうきうきしてきて、踊り出したくらいだったんだけど、手足がくにかくにやタコみたいになって、実際にはできなかった。

「ガンギマリやな。くくつ、親子そろって効きやすい体質か。ええこっちゃんのオ？」

「えへえ」

おじさまが私の目を覗き込んでくる。元々まん丸のお顔は縮んで、膨らんで、三角とか四角形になったと思ったら、元に戻る。すっごく面白い。あんまり笑っちゃいけないとは思うんだけど、笑うのをこらえられない。

私が笑っても、おじさまは気分を悪くしてないみたいだった。むしろ嬉しそうだった。私も、とっても嬉しかった。つま先から頭の先つちよまで、ハッピーでいっぱいだった。

「さあて魔理沙ちゃん。いよいよポチとなかよしする時間だよ。そこに仰向けになって、いつも君のお母さんが言ってるように喋ってごらん」

言われたとおり、ごろんって仰向けになる。ポチはじいっと私の身体を見てる。へっ、へっ、へって、口で息をしながら。

かあさまと同じように……きつとできる。実はこっそり、練習してるもん。

「駄目、魔理沙」

「……かあさま？」

腕をつかまれた。ぐったりして転がってたかあさまが、いつの間にか起き上がった。今まで見たことない、びっくりするくらい真剣な顔をしてた。

「駄目、魔理沙、絶対に駄目よ。こんな形で……いくら幸せになれない生まれだからって、こんな形で初めてを喪うなんて、いつかは理不尽に奪われるとしても、ひどすぎる」

「かあさま……？」

何を言ってるんだろう。しあわせになれない？ そんなわけない。だって今私、実際にしあわせなのに。どうしちゃったんだろう？

「旦那様、お願いです。どうかこんなことはやめさせてください。後生ですから、旦那様、魔理沙はあなたの子でもあるでしょう？」

かあさまはどうさまにすがりついて、お願いしてた。ヘンなの。私とポチがしあわせになるのに、なんで止めるんだろ。わけが分からない——わけが分からないのも、面白くてしかたなく感じた。

「亜理沙」

とうさまはニコニコしたままだった。その顔が、グニャグニャ曲がって見える。あはつ。「魔理沙の処女は売れた。お前の春を百回売っても足りないくらいの額だな。親子の縁でひっくり返すには、ちよつと大きすぎる額だと思わんか？ ……ああ、それから。あれはお前の娘ではあるだろうが、私の子ではない。私に奴隷の子などおらん。思い上がるな」

とうさまの言ってることは、しあわせすぎでばーになってる私の頭にはむつかしくって、分からなかった。でも、一言一言が私の耳をなでて、楽しくさせてくれた。こんなに最高の、かあさま、なんで泣いてるんだろ？ うれし泣きかな。

「旦那様！ お願いです、娘を、魔理沙を助けてください！」

「さあさあお母さん、お菓子の時間ですよ」

「アアッ、やめてくださいまし、それは、その菓だけは……ぐむっ……あ、へはっ」

おじさまがかあさまを引きはがして、おくすりを吸わせた。かあさまはすこしジタバタしたけど、すぐに大人しくなって、またあのとっても嬉しそうなお顔になった。かあさま

が嬉しいなら、私も嬉しいな。

「あへあ、あは。あー」

「お母様はちよつと混乱してただけだね。魔理沙ちゃんは心配しなくていいよ。……全く、手間アかかる奴隷やで。後でハメ殺して、立場分からせたる」

突然のことだったけど、とうさまもおじさまも、まだニコニコしたままだ。よかった、怒ってない。ポチもそのまま、口で息をしながらこつちをじつと見つめてた。私がちゃんとできるかどうか、テストするみたいに。

かあさまがしてたのは、どんなだったっけ。もう何度も見てきたから、大体は分かる。まずは指で分け目を開いて、相手によく見えるようにしてあげるんだ。それから、自分がどれだけなかよしいか、言葉にする。言わなくっちゃ、伝わらないから。

「あはっ、あへへ、ポチい、私ね、ポチとなかよしいになりたいの。もうガマンできない、だから、ね？ ポチのかたくなってるおちんちん、わたしのこのくちゅくちゅのところのところにねじこんで、じゅぶじゅぶぬぶぬぶ、沢山動かして、私のはじめてのなかよしさんになってくれないかなあ、ね？ お願い」

「ばフッ！」

「ひゃー！」

またのしかかられた。私は犬の言葉なんて知らないけど、それでも、ばふって鳴き声の意味は分かる。オッケーだ。じゃなかったら、こんなにおちんちんを硬くしたり、よだれが垂れてきそうなくらい息を荒くしたり、しないはずだから。

「んあっ……！」

赤黒いおちんちんが、私の裂け目に触れる。それだけで、我慢もそろそろ限界の私は、声を出してしまふ。ポチのおちんちは、人のとは違って先っちょがちよっと尖ってた。びっくりするくらい熱くて、硬い。犬のおちんちんって、みんなこういう風なんだろうか。それとも、私となかよしでできることにワクワクして、こうなってるんだろうか。それなら、とっても嬉しいんだけど。

「くく、犬畜生に処女奪われるっちゅうのに、抵抗の一つもせんとはな。つくづく、奴隷根性が染みついとるわ、不出来な母親と違ってのう。これも、霧雨殿の英才教育の賜物か。……よし、ええぞポチ。いつも通り好きなように食い散らかして、種えつけてやれ」

「アオオツ」

言われなくても。多分、そう言ったんだと思う。ポチはそのまま、私に、その尖った、硬くて熱いおちんちんを、私がお願ひしたとおりにねじ込んだ。

「ッ、ああああああんっ！」

ぶぢいつて。今、ぶぢいつて、すごい音がした。今まで一回もおちんちんなんて入ったことのない、きゆうきゆうのきつきつだったところに、おちんちんが入ってきた音だ。

こんな音がしたら、普通はものすごく痛いはずだって、自分でもそう思う。でも、実際はその反対だった。痛くなんて、全然なかった。それどころか、すつごくしあわせだった。何もかも虹色になって、光っては弾けて、幸せのふわふわに包まれた。ふわふわしてるんだけど、びりびりもしてて、私の喉とか手足とか震えるし、頭の中はばちばちいつてた。

「なんで？　なんでえっ？　あっはああ」

なんで全然痛くないんだろ、なんでこんなにしあわせなんだろ？　答えは分かってた。おくすりだ。あのおくすりが、痛いのも苦しいのも全部、しあわせに変えてくれるんだ。なんてすごい、なんて最高なんだろう。そんなおくすりを私に使ってくれたおじさまは、なんていい人なんだろう。

「あ！　んあはっ！　はああん！　あ、これ、んああ、はひ、あう、あ！」

ポチが腰を動かす。硬くて熱い犬のおちんちんが、私の中でにゅぷにゅぷ出入りしては暴れまわる。そのたびに、頭をうれしさのハンマーで叩かれたみたいになって、頭の中でがらあんがらあんって、しあわせの鐘の音が響く。最高以外に、どんな言葉で表していいかわからなかった。本当、今までのは何だったのってくらいすごくて、素晴らしくて、頭

がばーになりそうだった。いや、もうなってる。わたし、ばーだ。

「へあ、あは、んあつ！ は、はひ、ポチい、もつとして、もつとじゅぷじゅぷぬぷぬぷしてえつ、あはあ、あーつ！ あーつ！」

腰が止まらなかった。私も、ポチも。お互いの大事なところを擦り合わせて繋がるのが、あまりにもしあわせすぎて。犬とか人とか関係なく、なかよくなれるんだ。その証拠に、私のおまたからは、おつゆがぐちよぐちよ、ポチが動きたび飛びちつてた。ちよつと血の混じった、赤っぽいのが。あんな音がするくらいだから、血だつて出るよね。でも、全然痛くはなかった。ぜんぶぜんぶぜんぶ、きもちよかった。

「ひ、ひ、ひ。処女オ犬ツコロに奪われとんのに、なんも知らんとあへあへヨガリオつてホンマ親の娘よのお……オラ、ポケツとしとらんと見てみい、奴隷が。お前が腹ア痛めて産んだ大事な大事な娘が、今何されとるかをの」

「あはつ、みてえ、かあさま、私いまとつてもしあわせえへえつ！ はひ、ポチつ、ポチすごいのおつ、おちんちんすごおおい、あはあつ！」

「んあ、あ、あ……魔理沙……魔理沙？」

かあさまはまだぼうつとしてるみたいだった。ポチとなかよししてる私をしばらく見て、やつと何がどうなってるか、分かったみたいだった。

「……あ、魔理沙、魔理沙!?　嘘つ、嘘でしょう、こんなやつて、そんな!」

「かあさま……?」

きつと喜んでくれる。そう思ってたのに、違った。なんだか様子がおかしい。慌ててるといふか、信じられないものを見たつて顔だった。

「こんな、嘘よ、ごめんなさい魔理沙、母さんが至らないから、こんな、こんな」

「かあさま……?」

かあさまがへんだ。どうして泣きそうなお顔になつてゐるんだろう。ごめんなさいって、何に謝つてゐるんだろう。まるで私が、すつごく不幸な目に遭つてゐたいな言いかただ。そんなわけないのに。

「旦那様、お願いです、やめさせてください、旦那様ア!」

「薬が切れたか。ふん、まったく……何を言うかと思えばそれか。バカの一つ覚えだな。いいか亜理沙、もう一度言うぞ。魔理沙の処女は売れた。そして、一度売買が成立すれば、もうそれは私のものではない。それをどうするかはお客さまの自由で、私がどうこう言うことではない。……そもそも、言う義理もない。奴隷がどんな扱いを受けたところで、私の知ったところではないからな。……いい加減学ばないか?　そのあたりのことを」

「そんな——」

「それ以上食い下がるのなら、また焼き印を押してやらないといけなくなるな」

焼き印って言われて、かあさまは喉を鳴らした。私だってそうなる。お仕置きなんて、誰だって受けたくないに決まってるもの。

「うう、うううう」

「ふん、分かったら両手を出せ、ほら」

言われたとおりに差し出された手に、とうさまは白い粉を乗せた。おくすりだ。でも、なんだか多い。いつもの倍くらいはあるかな？

「こ、こんな量無理です、吸えません……！ 今日はまだ二回吸わされてるのに、こんなに吸ったら死んでしまいます！」

「バカが。お前の分は半分だ。残りは魔理沙に吸わせるんだ。お前自身の手でな」

「……そんな、実の娘になんて……それに、魔理沙だってこれ以上吸ったら！」

「できないのか？ なら焼き印だ。選ぶ時間を五秒くれてやる。娘に薬を吸わせるのか、それとも新しく身体に文字を刻まれるのか。今度は何がいい？ 淫乱肉便器とかどうだ」

「っ……うう……、うう……」

五秒って言われたけど、かあさまはもつとたっぷり悩んだ。それで、ぽそつと、小さな声でつぶやいた。

「わ、分かりました……魔理沙に、葉を、吸わせませう」

だよ。そのほうがずっといいもん。かあさまは痛くて熱い思いをせずにすむし、私はしあわせになれる。なんていうか、ヘンな質問だったなあ。こんなの、誰だってこつちを選ぶに決まってるもん。

「ごめんなさい、魔理沙、ごめんなさい……母さんを許して」

「うん、別にいいよ、あつ！ んんつ、ちょ、ポチ、今は駄目だってばあ」

待ちくたびれたぞって、ポチが腰を揺らす。今、大事そうなお話してるのに。

おくすりが差し出される。さっき吸ったのよりちよつと多いくらい。かあさまの顔は、なぜかくちやくちやだった。ヘンなの。泣くことなんて一つもないのに。だから私は、別に大丈夫だよって意味も込めて、勢いよくおくすりを吸い込んだ。

「……あつ、きた、あはつ、あつこれ、コレ、ああつ、いっあああああああああ」

目の裏で虹色の光が次から次に浮かんで弾けて、頭の中をぐちゃぐちゃにかきまわす。着たいお洋服が見つからなくて、タンスの中をひっくり返したときみたいに。昔の思い出が引つ張り出されては戻されて、引つ張り出されては戻されて、頭のなかでよみがえる。

「あはつ、あーつ、しあわせつ、えへつ、えへへ、しあわせええええ、あひい」

頭の中がぐちゃぐちゃだ。もう、ものなんてまともに考えられない。目とか鼻とか口

からいろんなお汁が噴き出して、身体をべとべとにしていくな。でも、そんなの、どうでもよくなっていた。というか、そんなの考えてられなかった。頭の中のものを考えると、にまでうれしさと楽しさとしあわせが流れ込んで、隅から隅までみっちり埋め尽くしてた。よく頭が真つ白になるっていうけど、それはこのことだ。

「さあ、次はお前の番だ。早くしろ」

「そうだよおかあさまあ、はやくっ、はやくしあわせになる？ 泣いてないで、ねっ？」

なんで泣いてるのか分かんないけど、とにかくおくすりを飲めば、いやな気分も悲しい気分もみんな綺麗さっぱり吹き飛んじやうはずだった。かあさまも分かてるはずなのに、それでもおくすりに手をつけようとしなかった。結局、早くしろってとうさまにもう一回言われて、ようやく吸い込んだ。

「ごめんなさい魔理沙、母さんを許して——あひいっ」

くしゃくしゃだった泣き顔が崩れた。ひきつったような顔になった後、それもとろけて、笑い顔になった。どこを見てるのか分からない。それは、あまりにもしあわせで、ものを見てる場合じゃないからだ。おくすりが効きはじめたんだ。よかった、これがかあさまもしあわせ。泣かなくてすむ。

「ぐるぐる」

「ごめんねポチ、途中だったのに。いいよ、待たせちゃった分、いっぱいぢゅぶぢゅぶ、ああああああ!? あうア! へっ、ひ、あっ、いきなっ、りいっ! ひあ、んんんーっ、はあうあああ!」

まだ話してる途中だったんだけど、ポチはそんなのおかまいなしだった。いろいろの中に入れた火箸みたいに熱くなってたおちんちんが、私の中をずぶずぶ出入りして、うねうねしてるところをめくり返していく。

ポチの動きはすっごく激しかった。乱暴って言うてもいいくらいだった。私がずうっと待たせちゃったから、怒ってるんだ。だから仕返しに、おちんちんで私をいじめるつもりなんだ。ポチの狙い通りになってると思う。ポチのが出たり入ったりするたびに、頭の中をぎゅぐゅ埋め尽くしてたよろこびやうれしさが、やまびこみたいに響いて、喉とかお腹とか、いろんなところを震わせる。いじめられてはすなのに、ポチのことが好きで好きでたまらなくなっちゃう。

「くく、邪魔が入ったときは何やと思ったが、やっぱり奴隷の子オは奴隷やな。あんな歳で犬チンポにヨガラされるとは、将来が有望やの……さて、お前やお前。このアバズレ」
「あへあ」

おじさまはかあさまを転がすと、覆いかぶさった。なかよしの姿勢だ。またかあさまと

なかよししてくれるんだ。一日に二回もだなんて、おじさまはほんとにいい人だなあ。

「奴隷の分際で調子ぶっこきおって、勘違いしとんなやボケ。今から、儂のチンポで身分つてもんを教育してくれるわ。……霧雨殿、構いませんな？」

「ええ、ええ、もちろんですとも。亜理沙の肉体もお買い上げいただいておりますからね、どう扱われようと、自由です」

「やとさ。残念やったのお？ お前がアテにした旦那様は、助けちゃくれんぞ」

「あへ、へひ、あはあ」

「ふん、聞こえとらんのか、つまらんのお」

聞こえるわけではない。だって、あのおくすりをつかうと、頭の芯の芯まで全部しあわせで埋め尽くされるんだもん。

おじさまは、しあわせに埋もれてるかあさまの両脚をひろげて、何もしなくてもおつゆをとろとろつてあふれさせてる裂け目に、ばんばんに膨らんだおちんちんを押し当てた。

「ほおれ、せいぜいヨガれよメスブタがア！」

「あひいいいいいいいい！」

「ぶぢゅんっ！ て、他じやなかなか聞けないような音がした。おじさまのおちんちんが、かあさまの裂け目の中に、根元まですぶうって入り込んだ音だ。出たのはすごく大きな声

だったけど、うるさいとは思わなかった。

「は、目の前で娘が犬ツコロに犯られとるときに出す声やないのオ、このド淫乱が。そら、ここがエエんやろうが？ おお？」

「あああひつ、んおつ、オああつ、ひい、ひい、アアッ！ンア！イツ、アオオ！」
おじさまはすぐに腰を振り始める。まっすぐ上げて、そのまま落とす、地面に杭を打つときみたいな動きだった。おじさまの杭がかあさまの地面を抉るたび、かあさまはすごい声を上げて、おじさまの下で全身をびくんびくんって跳ねさせる。

「ばうウッ」

「ああっ！んひつ、あくうつ！あうあつ、ポチつ、そんな、はひゅつ、ああっ！」
おじさまに負けてられないと思ったのか、ポチまで勢いよく動き始める。あまり激しくするから、ぎゅうつと抱きついてないと吹き飛ばされてしまいそうだった。お日様の匂いが鼻をくすぐるけれど、そんなこと気にしてる場合じゃなかった。

「っあ!? ひ！ポチ、そこ駄めえアああッ!? ひくつ、あくつ、ああっ！」

私が抱きついていたせいで、ポチは余計にやる気になったみたいだった。腰の動きが、余計に速くなる。おちんちんの先っちょが、私の奥深く、壁というか、行き止まりにぶつかる。そるとそこから、雷みたいなのが一直線に駆け抜けて、頭の後ろ側ではあんって弾けた。

一回だけでも、氣を失っちゃいそうなくらいだった。そんなすごいのを、ポチは何回も何回も繰り返ししてきた。あまりにもしあわせすぎて、意識ごと吹き飛ばされそうだった。

「そろそろそらア、ここがたまらんのやろが！ もつと鳴けやこのメスブタ！ 娘の前で無様にアンアンヨガつとればええんじやお前はア！」

「アーツ！ ひい！ あへっ！ オッホッホオツ、ひい！ オオオンツ、いイツ、ひイ、ひイ、イイイーっ！」

「ばふっ！」

「んあああ！ あくあ！ ひあ、あつあつあつ、はああん！」

ぐちゅぐちゅずちゅずちゅぬぶぬぶばん、いろんな音が部屋の中で響いてる。私とかあさまはそこに喘ぎ声を足して、音楽をつくる。しあわせって音楽を。普段はしかめ面のとうさまが、ありえないくらいニコニコして聞いてくれている。この曲は、私たちだけじゃなくて、周りのみんなもしあわせにしちゃうんだ。

でも、それもいつまでもは続けられそうになかった。私も、かあさまも、おちんちんに突かれて、もう何回もイッちゃった。ほんととは男の人がいくまで待つのが正しい決まりなんだけど、こんなの耐えられるわけがなかった。

「はひい！ またいくつ、またイッちゃうのおつ！ おちんちんああああー！」

おちんちんでいくのは、自分で弄つていくのとは全然違つてた。本当に同じことなのか、疑つちやいそうなくらい。……というか、違つて当たり前だつた。自分で弄るのは、本物じゃないから。指は結局、おちんちんの代わりでしかないんだ。代わりでしかないから、本物ほどしあわせになれないんだ。私は今まで、そんな偽物ばかり味わつてきた。そして今、はじめてのホントの味に、やみつきになつていた。こんなおいしいの、はじめて。

「んはあああつ、おいしいのっ、おちんちんおいしいのおっ」

おいしすぎて、思わず口に出しちゃうくらいだつた。もうこれなしじゃいられないつてくらい、私はおちんちに夢中になつていた。とうさまは意地悪だ。こんな最高のことを、しちや駄目つて言い続けてきたんだから。でも、そんな恨みもどうでもよくなるくらいに、頭の中がしあわせでいっぱいだった。

「そうかいそうかい、魔理沙ちゃんはおちんちんが大好きなんだねえ」

「はひい、大好きですう、ポチとなかよくできてしあわせえつ、おじさまあ、ありがとう
ございまあはああああ！」

「だ、そうやぞ雌豚、立派な娘になつて嬉しいなあ、お？ どうなんやオラ！ ポケツとしとらんと答えてみんかいこの肉便器が！」

「アヒツ！ はひい！ あはあああ、あへっ、へひっ、オオツ、ひい、ひい、イイーツ」

「は、なアんも分からんようになったのか、エエさまのお」

何も分からなくなつてあたりまえだった。ただでさえ大きいおじさまのおちんちんで、ぐちゅぐちゅぬぢゅぬぢゅ、あんなに激しくなかよしされたら。でも、うらやましかつた。何を言われてるのかも分からなくなるくらいいのしあわせだなんて、他のことじゃ、きつと何をどうしてみたつて味わえないに決まつてるもの。

「ぐるるるるるっ！」

「あああああああッ!」

ポチの動きが、もっと激しくなる。まるで、私が考えてることを見抜いてるみたいに。熱いおちんちんがじゅぼじゅぼつて出入りしてる。あまりにも熱いから、おつゆでぐちよぐちよのそこですら、火がついちやうんじゃないかと思えるくらいだった。

「んいつ!? やアあつ、なんか、おつきくつ、ひいつ、あああッ!」

身体の中で、みちみち音がする。私の穴が、広げられてる。ポチのが膨らんでるんだ。

「おっとお、魔理沙ちゃん、それはそろそろポチがイキそうだつてサインだよ。どうする、どこに射精して欲しい? 魔理沙ちゃんの頼みなら、ポチはどこにだつて射精すさ」

「はひい、んあ、私のなかあつ、なかがいいの、ポチい、っ、わたしとなかよしになつて、はひっ、あうあ、一緒にイこ? イこ? ねっ? いっしょにいっ」

「ひひ、言われんでもそいつは膣内射精以外のことなんぞ考えとらんわい……よオオし、こっちもそろそろ射精すぞッ、この肉便器が、射精すぞッ、射精すぞッ、母子ともども種付けじゃッ、娘の目の前で種付けされろッ、オオオイぞイクぞッ」

「はひいッ、あひいえッ、ひい、アーッ、アーッ、アアアアアアアッ」

おじさまの腰の動きが、どんどん速くなっていく。おじさまもそろそろいきそうなんだ。かあさまも、ポチだって。私たちみんないきそうになって、そこに向かってまっすぐに向かっていく。

「バフッ」

「射精すぞオオオ射精るぞッ、おおおおおッ、オオオオオアアアア！」

「あはっ、ポチッ、ぽち、あああああああああッ！」

「へひい、あおあああッ、あッ、おっ、アーッ！」

ポチのが、お腹の中で暴れてる。暴れてるっていうとなんだか悪いことみたいだけど、本当は、すっごく素晴らしいことだった。なんていうか、空を飛んでるって感じだった。あつたかい……いや、熱いくらいのがお腹の中にどくどくって流れ込んできて、その熱さと粘っこさで、私は今までにないくらいイク。イクたびに、私はふわふわって空を飛ぶ。うっかり手を離しちゃった風船みたいにどこまでも飛んで行っちゃいそうだから、ポチの

身体をぎゅっと抱きしめて、飛んでいかないようにする。

「オオオオオオオオ、なんちゅう締め付けや、ホンマに経産婦のマンコかコレッ、オオ、畜生、キンタマがッ、キンタマが持つて行かれるッ、オッほ、おっほお、コレやコレコレ、コレがあるからこの便器はたまらんのじゃオオオオ」

「ひいッ、いいいああああッ、おあッ、ひっ、ひっく、あつく、あつひ、ひいえーッ」
かあさまも飛んでるんだと思う。だって私とおんなじように、がくがくがくがく全身を震わせながら、おじさまにぎゅううううってしがみついてたんだもの。

「っはアー……射精した射精した。この雌豚のマンコ、ホンマにザーメン搾り取るためにあるんちゃうか。ッかあ、半端ない」

「はひっ、はひい、ひい、はああッ、あへっ、あひいっ」

「ポチい、あはあッ、んあッ、あはあッ、あつく、はああッ、あッ、あう、んんんッ」

おじさまはかあさまになかよしの証を注ぎ終えたみたいだった。男の人はそういうとき、長いため息をつくからわかる。なのに、ポチのなかよしの証は、まだ出てる……出てる、まだ出てる。びゅくびゅくって、止まらない。ちよつとまつて、私もうそろそろ、お腹の中がいっぱいになってきてるんだけど。

「ああそうだ、言い忘れてたけど魔理沙ちゃん。犬はね、仲良しの証、軽く十分くらいは

出し続けるから。くくく、頑張っておくれよ？」

「じゅっ……」

そんな、そんなのって、出してくれるのはうれしいけど、そんなに受け止められない。だつてもう、お腹の中、ぱんぱんになつてゐるのに。

「あうっ、あつ、待つて、ポチ、あくうっ、うあつ、あつあつ」

待つてつて言つてつて止められるものじゃないんだろうし、ポチに止めるつもりなんてないみたいだつた。お腹の中に収まらなくなつたなかよしの証が溢れ出して、私とポチが繋がつてゐる部分から溢れ出していく。

「ひひっ、ボテたみたいに腹ア膨らまして、犬のガキでも孕むつもりか、お？ 犬ころのザーメンブチ込まれてヨガリ狂いおつてからに、親子揃つてとんでもない淫乱やな、っは、見てみい肉便器、お前の娘のバージン、犬畜生にもつてかれたぞ」

「……」

「なんや、氣イ失つとるんか、つまらんの」

「あーっ、あつあつ、もういっぱいいつ、もうむりいつ」

おじさまが何か言つてゐる。けど、何言つてゐるのか分からなかつた。だんだん、目の前が暗くなつてきた。あんまりきもちよすぎて、ふわふわ飛びすぎて、どこか外側に飛び出し

そうになってるんだ。空を飛んでたら、当然どこかに掴まるなんてこともできない。私はそのまま、暗い中に、意識ごと放り出されていった。

「……ごめんなさい、魔理沙」

最後に、かあさまの声が聞こえた。なんで謝ってるのか、やっぱり分からなかった。